

「おじいちゃんゆずり」

山形県 光傳寺住職 庄司憲昭

ある年の秋のお彼岸、その中日に可愛らしい男の子がおじいちゃんと一緒にお参りにやって来ました。ご丁寧に手土産まで持って。

お寺と和尚さんのどこが気に入ったのか、その子はいつも、小さな包みのお土産を持って来てくれるのです。

昨年、その子のおじいちゃんが雪降る季節に亡くなりました。私が枕経にうかがうと、亡くなったおじいちゃんがいつもそうしていたように、玄関あたりが丁寧に除雪されていました。それはまるで亡くなったご本人が、ご自分で雪かきしたかのようでした。

何とよく見ると、雪ズボンをはいた当時幼稚園の年長さんだった男の子が、プラスチック製の可愛らしいスコップを持って、雪かきをしているではありませんか。私は、てっきり雪遊びをしているものだと思います。

しかし、枕経のあとに聞くと、何とその子は「何だか好きでやっているみたい。」というご家族の言葉に、驚くと同時に感心しました。

私は「おじいちゃんゆずり」なのだとすぐに気が付きました。亡くなったおじいちゃんというお方も、生前私が、お盆・お正月のお参りにうかがうと、必ず何か季節のものを分けて下さいました。そして晩年、丹精込めて世話をしていた盆栽を「もう世話が出来なくなった。」と言い、行くたびに一鉢ずつ持たせて下さいました。

現在、見事な盆栽だった松は、お寺の正面脇に地植えされ、堂々とした姿で、お参りの方々を迎えてくれております。

「この松は、おじいちゃんが育てていたものだよ。」とお見送りしながら私が言うと、その子は、嬉しそうに恥ずかしそうに、ご家族の後ろに隠れました。「さしあげる喜び」は、おじいちゃんから確実に孫へと伝えられていたのです。

—こんにちの実践は、今は亡きお方の、在りし日の姿—
受け継がれた行いの、何とあたたかな姿であることか。

私たちも、こんな風に伝えてゆきたいものです。(終)